

日蓮大聖人御書全集

じかくだいしじ

慈覚大師事

新版
1377
〜
1379

慈覚大師事

じかくだいしじ

こうあん ねん がつ にち さい おおたじようみよう

弘安3年('80) 1月27日 59歳 大田乗明

が がんさんかん きぬ け さ いちじよう た お

鵝眼三貫、絹の袈裟一帖、給び了わんぬ。

ほうもん あきもとたろうひようえのじようどの ごへんじ しようしようしる

法門のことは、秋元太郎兵衛尉殿の御返事に少々注し

そうろう ごらん そうろう

て候。御覧あるべく候。

う がた じんしん あ がた ぶつぼう あ そうろう

なによりも、受け難き人身、値い難き仏法に値つて候に、

ごしやく み いっしやく かお かお なか いっすん まなこふた

五尺の身に一尺の面あり、その面の中に一寸の眼二つあ

いっさい ろくじゆう およ おお もの み なか よろこ

り。一歳より六十に及んで多くの物を見る中に、悦ばし

ほつけ もつと だいいち きようもん 浅

きことは「法華は最も第一なり」の経文なり。あさまし

きことは慈覚大師の金剛頂經の頂いの字を釈じやくして云わ

く「言うところの頂いとは、諸もろもろの大乗の法ほうの中なかにおいて

最勝さいしようにして無過上むかじようなるが故ゆえに、頂いをもつてこれに名なづく

乃至ないしひと人の身みの頂み、最もこれ勝すぐれたるがごとし乃至ないしほつけ法華ほうけに

云いわく『この法ほうは法位ほういに住じゆうして。今いまま正さしくこの秘密ひみつの理りを

顯けんぜつ説ゆえす。故こんごうちように金剛頂いと云うんぬんなり」云々い。また云こんごうわく「金剛

は宝たからの中なかの宝たからなるがごとく、この經きようもまたきようしかなり。

諸もろもろの經法きようほうの中なかに最もつともこれ第一だいいちにして、三世さんぜの如來にょらいの

髻もとどりの中なかの宝たからなるが故ゆえに「等とううんぬん云々」。

しやくく こころ

ほつけ もつと だいいち

きようもん うば

この釈の心は、「法華は最も第一なり」の経文を奪い

と こんごうちようきよう

つ

ひと

み

いただき

もつと

取って金剛頂経に付くるのみならず、「人の身の頂、最

すぐ

しやくく

こころ

ほけきよう

ごうべ

き

もこれ勝れたるがごとし」の釈の心は、法華経の頭を切

しんごんきよう いただき

すなわ

つる

くび

き

かえる

つて真言経の頂とせり。これ即ち鶴の頸を切つて蝦の

くび

つ

しんごん

かえる

し

ほけきよう

つる

おんくび

頸に付けけるか。真言の墓も死にぬ、法華経の鶴の御頸も

き

み

そうろう

じんしん 受

まなこ

ふ

しぎ

切れぬと見え候。これこそ人身うけたる眼の不思議にて

そうら

は候え。

さんぜんねん

いちどはなひら

うどんげ

てんりんしようおう

み

三千年に一度花開くなる優曇華は、転輪聖王これを見る。

くきようえんまん

ほとけ

ほか

ほけきよう

おんかたき

み

究竟円満の仏にならざらんより外は、法華経の御敵は見

知

いちじよう

敵

夢

かんが

い

しらざんなり。一乗のかたき、夢のごとく勘え出だして
そろう

候。

じかくだいし おん 墓

慈覚大師の御はかは、いずれのところに有りと申すこと、

あ もう

聞

そろう せけん い

おんかしら でわのくにりっしゅうじ あ

きこえず 候。世間に云わく「御頭は出羽国立石寺に有り」

うんぬん

こうべ み べつ ところ あ

云々。いかにもこのことは、頭と身とは別の所に有るか。

みよううんぎす よしなか こうべ き てんだいぎす みそうら

明雲座主は義仲に頭を切られたり。天台座主を見候え

でんぎようだいし そうら だいいちぎしん だいに

ば、伝教大師はさておきまいらせ候いぬ、第一義真・第二

えんちよう りようにん ほけきよう しよう しんごん ぼう だいさん

円澄、この両人は法華経を正とし、真言を傍とせり。第三

ぎす じかくだいし しんごん しよう ほけきよう ぼう

の座主・慈覚大師は、真言を正とし、法華経を傍とせり。

その已後、代々の座主は相論にて、思い定むることなし。

第五十五ならびに五十七の二代は、明雲大僧正、座主な

り。この座主は、安元三年五月 日、院勘を蒙って伊豆国

へ配流。山僧、大津にて奪い取つて後、治承三年十一月に

座主となりて、源右將軍頼朝を調伏せしほどに、寿永

二年十一月十九日、義仲に打たれさせ給う。この人、生け

ると死ぬと、二度大難に値えり。生の難は仏法の定例、

聖賢の御繁盛の花なり。死の後の恥辱は、悪人・愚人・誹謗

正法の人の招くわざわいななり。いわゆる大慢ばら門・須利

とう

かんが

みよううん

いつこう

しんごん

等なり。ほぼこれを勘えたるに、明雲より一向に真言の

ぎす

のち

いままんじゆうよだい

いっばやくよねん

あいだ

いつこうしんごん

座主となりて後、今三十余代・一百余年が間、一向真言の

ぎす

ほけきよう

しよりよう

うば

座主にて、法華経の所領を奪えるなり。

ひとびと

しゃか

たほう

じつぼう

しよぶつ

しかれば、これらの人々は釈迦・多宝・十方の諸仏の

だいおんてき

ぼんしゃく

にちがつ

してん

てんしやうだいじん

しやうはちまんだいぼさつ

大怨敵、梵釈・日月・四天・天照太神・正八幡大菩薩の

おんしゆうてき

み

そうろう

わ

でしとう

むね

そん

御讐敵なりと見えて候ぞ。我が弟子等、この旨を存して

ほうもん

あん

たも

きやうきやうきんげん

法門を案じ給うべし。恐々謹言。

しやうがつにじゆうしちにち

正月二十七日

にちれん

かおう

おおたにゆうどうどのごへんじ

大田入道殿御返事